

撰 周易林二植 周易新林占三郭璞撰 周易莖四 周易亨氏占九 顔氏易占三

〔通憲入道藏書目錄〕一合第一櫃

周易一部十卷九箇卷缺 同注疏經一部十卷 周易副象二卷上下 周易集注二卷四五

易通統卦驗玄圖一卷 周易略例二卷 周易音義一卷

筮具

〔幸庵夜話〕一著は日本にては、常州筑波山に生ず、土凝て龜の甲の形也、目口手足も龜の形也、此甲に著十三本宛生ず、高サ三尺計、キセルのラウ程のふとさ也、葉は野菊の葉の様也、此根は芹などの根の様にして、かの甲に生ずるを、龜ともに掘て取也、龜は瓦杯の焼たる同じ事に、急度龜の形也、尤幾所にも生ず、唐にても著の生様如此、日本にては筑波山也、

〔和漢三才圖會十五〕筮めど 著トギキ 詳山草類

按、筮者、用著草之莖五十、作易爻以占吉凶、一根本五十莖者佳

〔和訓栞前編三十三〕めど 新撰字鏡和名抄に、著を訓せり、今めどはぎといふ是也、されどめどは

ぎは、酉陽雜俎にいふ合歡草にして、著にあらすといへり、又齊頭蒿をも筮に用るをもて、めどぎともいふ也、筑波山のめど木を用ゐる事もふるし、めどを妻夫の義とし、陰陽の名なるをもて、筑波山の産を用ゐる成べし、略 飛鳥井家の説に、著は秋花しろくうす紫に咲り、かはらたでも、てまり草ともよめり、俗にやはぎ草ともいふと見えしは、めどはぎを指る也、

〔古算器考〕大易撰著、亦以一著當一數、則其來遠矣、著策所以決疑、非常用之物、故特隆重其制、而加長、長則不可以橫、故皆縱列、惟分二象兩之後、掛一策以別之、使無凌雜、皆縱列也、又其數只四十九、故四揲以積其實數、共用專、專則誠也、

〔慶長日件錄〕慶長八年四月廿一日、周易御傳授之御道具、可申付之由、被仰出、則御細工之大工召寄寸法以下申付畢、廿九日、易御道具共出來之由、大工告來之間、則勾當局へ參、道具共出來之由申